

## 第二節 前近代ムエタイ 2

### 第一項 見世物としての前近代ムエタイ

National Culture Commission (1997) は、次のように述べている。

「スコタイ時代のムエタイは、娯楽の一つとして賭け事の対象にもなっていた。ラムカムヘーン大王は、祭事として行われるムエタイを伝統として税金を徴収することもなかった。」<sup>65</sup>

「初めてムエタイが法律で謳われたのは、アユタヤ時代でソムデート・ブラ・エーカトソロット王が作った法律『プラーアイヤカーンベセット』に登場する。条文の 117 条は、ムエタイの中で、突き蹴りで人を死に至らしめても罪にはならない、また勝ったムエタイ選手に賞金を与えても良いとしていた。しかし、主催者は、ムエタイを競技や見世物として行うに留め、決して殺し合いのような残酷なスポーツにしてはならないと定めていた。」<sup>66</sup>

「アユタヤ王で最もムエタイが強いと言われたソムデートパチャスア王（虎王）は、ムエタイに興味を示し、自らも稽古していた。そしてアユタヤの男達にムエタイを奨励していたと言われる。その時代の男たちは、ムエタイをすることで優遇され、宮殿に住みムエタイの師範になったり、近衛兵として王を護衛していた。当時は、武器を持って宮殿に入れなかったためである。王の近衛兵は、「コンタナーイルアック」と呼ばれ、武人の集団でもあり、アユタヤの政治に大きな影響を与えた。アユタヤ時代には、ムエタイの人気があったが、まだ興行として成り立っていなかったためにムエタイは、儀式や祭りでしか見られなく、その報酬も少なく、職業として成り立たなかった。その頃のムエタイは、まだルールが確立しておらず、何をやっても良かった。まだグローブもリングも無い状態でお寺の敷地などで闘われた。拳には、ただ紐を巻いて闘っていた。」<sup>67</sup>

「このムエカッチュアクは、村祭りや寺祭りの催し物の一つとして伝承されてきた。ルールは、アユタヤ時代頃より、試合時間の計測のためにココナッツの実に小さい穴を開けて、水に浮かせる。水が入りココナッツが沈んだ時に試合を止めていた。それから休息をさせて、また闘わせる。降参したらそれ以上は試合をさせずに負けとなる。一試合の 1 ラウンドが終わったら全試合の 1 ラウンドが終わるまで 2 ラウンドは、始まらなかった。休憩時間が長くなるような形式になっていたのである。このムエカッチュアクの競技場は、土の広場で行われ、ほとんどが寺の敷地であった。勝ったら賞金が貰えたり、地位が向上したりしたという。報酬は、5 タマルン（4 パーツ）もらえた。」<sup>68</sup>

<sup>65</sup> National Culture Commission, 1997, p14

<sup>66</sup> National Culture Commission, 1997, pp15-16

<sup>67</sup> National Culture Commission, 1997, pp16-21

<sup>68</sup> National Culture Commission 1997, p23

「この時代(菱田注:ラタナコーシン初期)のムエタイはモンコンを着けて闘った。選手は、様々な技を使う。身体を守るためにいろいろな形で防御をする。見ている人達は、大きな声で応援した。両者とも傷つくまで試合をした。勝者の方が負けた方よりも多く賞品がもらえる。この時代のムエタイは、アユタヤ時代からの言葉でムエイ、ムエイプラム、ティモエ、トイムエと呼ばれた。」<sup>69</sup>

「この頃(菱田注:ラタナコーシン時代初期)のムエタイの試合は、まだルールがはっきりせず、突き蹴りだけでなく、投げることもできた。また、この頃は時間を決めて行わずに片方が敗北を認めるまで闘った。」<sup>70</sup>

「第一次世界大戦後の1920年に新しく永続するムエタイ場がスワンクラブカレッジの中に作られた。はじめは20平方メートル以上の土の上で試合を行っていた。観衆はその中には入れず、選手は拳に紐を巻いて頭にはモンコンをしめて闘っていた。腕にはブラジアットを巻き、短い腰履き、上半身は裸、裸足で闘った。審判は紫色の布を巻いて靴下とシャツは白を着用していた。」<sup>71</sup>

武術ムエタイを競技化したものが、現在では、ムエカッチュアクと呼ばれる格闘方法である。現在でも記念式典などに時折興行されている。現在もその良く似た形式は、ミャンマーのミャンマー・ラウエーにも見られる。(次項で解説)

上記の National Culture Commission(1997)によると、ルールに詳細な決まりはなく、原っぱなどで戦われ、何をやっても良かったと書かれている。この時代には、もちろんグローブもリングもなかった。拳に紐を巻くと、素手の場合より拳を強く握ることができるため、破壊力が高まり相手は倒れやすい。素手の場合であると拳は、どんなに鍛えても柔らかさを補えない。顔面の骨とぶつかりあっても、内出血するか、ほぼ骨を折る程度であるが、紐を巻いて相手を打撃すると脳を揺らすほどの強力な力を生み出し、ノックアウト率が高くなるのである。これは、現在の UFC<sup>72</sup>でも危険であると判断され、拳をテーピングで固定したりバンデージを巻くことが禁止されている。これらの面から考えると、拳を紐で巻いて闘うムエカッチュアクは、相手を倒しやすくするために考案されたと考えられる。文献によれば、実際にこのムエカッチュアクで命を落としたボクサーもいると言う<sup>73</sup>。

ムエカッチュアクが見世物として行われたのは、祭りや記念式典での興行であるため、余興のためにイベントの趣旨によっては、何をやっても良いと思われていた可能性がある。現在でも祭りなどで、女性対男性の試合が行われる事があるが、このように娯楽のための余興ならば、時にはどちらかの強さを試すだけではなく、エロティックなものやグロテス

---

<sup>69</sup> National Culture Commission 1997,p28

<sup>70</sup> National Culture Commission 1997,p29

<sup>71</sup> National Culture Commission 1997,p43

<sup>72</sup> UFC とは、アルティメットファイティングチャンピオンシップの略である。アメリカを中心として行われている総合格闘技、素手による顔面攻撃も認められている。

<sup>73</sup> National Culture Commission, 1997 pp48-49

クな試合も含まれていたと想像できる。現在でも夜の歓楽街では、ムエタイを見世物として半裸で女性のムエタイショーなどが行なわれる時も見受けられるからである。しかしながら、近代ムエタイへ推移する直前のムエカチュアクは、近代ムエタイの基礎になったスワンクラブカレッジで行われていたため、そのようなエロティックなものやグロテスクな見世物は行われていなかったとみられる。なぜならスワンクラブカレッジは、西洋の軍事学校をモデルにして創られた官僚を育成するためのエリート男子校であったからである<sup>74</sup>。このような場所で行われていたムエカチュアクは、娯楽のために何をやってもよいという雰囲気を持っていなかったと言えよう。また、このスワンクラブカレッジが創られた時代、1920年代はタイの独立を保つために、タイ人の勇猛さと仏教文化を伝承する気品ある民族であると西欧に対してアピールする必要があったと考えられるからである。もう一つの理由は、時代が中央集権制になりつつあり、地方の強者としてしられると、中央に集められて強さを競い合っていたからである<sup>75</sup>。ムエカチュアクには、格闘技としての強さと勇猛さと共に、ワイクルーのような伝統的な舞いを受け継ぐ気品のある民族武術でなければならぬという理念の要請があったと見てよいだろう。

## 第二項 ムエカチュアクの技法

ムエカチュアクは、拳に紐を巻くと素手よりも拳の握りが硬くなり破壊力が高まることは、第一項で述べた。ムエカチュアクは、グローブを導入する前の格闘方法であり、現在でもムエカチュアクは、国境付近で時折開催される。しかしながら、現在のムエカチュアクを行う選手は、すべて近代ムエタイを経験している元ムエタイ選手であって当時のムエカチュアクの技法を正しく再現するものではない。

グローブが導入される以前にムエカチュアクを経験したというタマサート大学のデン師範は、ムエカチュアクのルールを以下のように語った。

「私は、ラジャダムナンスタジアムができる前にラックムアンという所でカチュアクを二回やりました。ルールは何をやっても良かったのです。パンチ、キックの他に今のルールにはない技、投げたり、締めたりしても良かったのですよ。(間節技も可) どちらかが倒れるか降参したら終わりというルールです。」<sup>76</sup>

当時のムエカチュアクの技法を伝えるには、映像はなく、また当時の写真からだけでは技法を十分に読み取る事はできない。そのため、本項ではムエカチュアクの技法を、今日行われているムエカチュアクとムエカチュアクに類似しているミャンマーの拳法(ミャンマーラウエー)の報告からかつてのムエカチュアクの技法を読み取る事を試み

---

<sup>74</sup>Vail 1998 ,p72

<sup>75</sup>Vail 1998 ,p74

<sup>76</sup> 2007.8.16 タマサート大学 デン師範

た。

1999.10.28 にラオスとの国境の町、ノンカイでムエカチュウアクの試合が開催された。出場選手は、ミャンマー人、ラオス人、タイ人、マレーシア人、ロシア人、そして日本人である。日本からは、野村正克という 12 戦のムエタイキャリアを持つ選手が出場した。拳はバンテージを巻いて素手より硬くしてあるために危険度が増している。多くの選手は、相手の攻撃を一発でもまともに受けると鼻は折れているようだ。両者の間合いは、ムエタイよりも遠く距離をとるが、一度噛み合えばダンゴ状態になってしまう。実際、この日の試合では、選手達は恐怖のあまり振り回すようなパンチで喧嘩のようなファイトを展開して KO を続出していた<sup>77</sup>。

野村選手は、判定負けに終わりノックアウトを免れたが、顔面を 10 針も縫う損傷を負った。彼によれば、ムエタイとムエカチュウアクの差は、パンチの破壊力であると言う。ムエタイ風のブロック（防御）もムエカチュウアクでは、意味をなさず正面からの攻撃（ストレート）は防ぎようがないと言う。このストレートを防ぐには、相手との間合いをいつもより（ムエタイより）も広く取り、相手の接近に注意を払わねばならないと言う。

また、現在でもミャンマーに残る格闘技ミャンマー・ラウエーは、ムエカチュウアクとほぼ同じルールで闘われている。ミャンマー・ラウエーも凄惨なノックアウトが続出する試合として知られている。フリーライターの早田寛は、ミャンマー・ラウエーを以下のように報告している。

「試合は 3 分 5 R で二分の休憩という形式で行われるが、ミャンマー・ラウエーは、フリーノックダウン制。どちらかの選手が降参するまで必死の形相で殴りあう。しかし、試合の結末は「降参」というよりは「壮絶な KO 劇」といった方が合っているのかも知れない。全ての試合が、2 ～ 3 R という早期のうちに決着がつく。」<sup>78</sup>

近代競技化する前のムエカチュウアクが現在のミャンマー・ラウエーと同様な格闘技であったとしたら、蹴り技によるのではなく、拳による殴り合いが多用されていたと推測され、KO 決着が求められていたと考えられる。

また、当時はルールに関する規定は詳細には定められていなかったため、打突の他に投げ技や関節技があった可能性もある。ムエカチュウアクは、第一項で述べたような武術を基礎に何をやっても良い格闘方法に加えて、日本の空手のように遠間から接近し打突する技法が多用されていたとも考えられる。なぜなら当時の写真に残る闘いの構えは、接近戦で打ち合う場合に不向きな構えであるからである。また足幅を広く取る場合は、遠方から接近するのに都合が良いからである。なお、前後に歩幅をとって構えると、蹴り技は前方へしか蹴ることはできず、現在のような廻し蹴りをすることはできない。この現在に残る写真からはムエカチュウアクの技法の特徴を引き出すことはできないが、現代のように中段への廻し蹴りが主な攻撃であったことは考えられない。

---

<sup>77</sup> 1999.10.28 ノンカイ

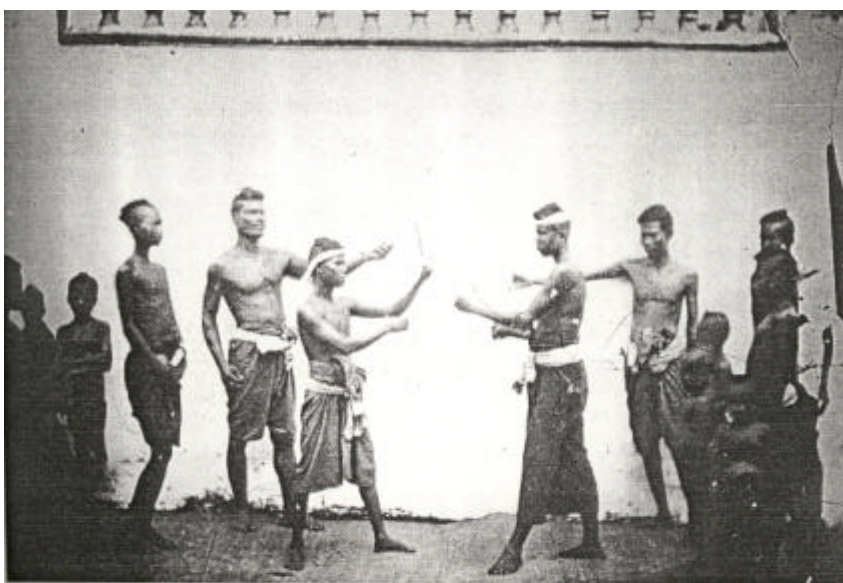
<sup>78</sup> 早田寛「格闘技通信」NO422 2007.6.8 p50

『Sirappa Muaythai』 National Culture Commission 1997 pp39-42 より



**Fig 22,23 記念試合**

(下の写真は、高位の軍人である Marupongsiripat の葬式で行われた試合である。)



**Fig 24,25 軍人学校でのムエタイ訓練**

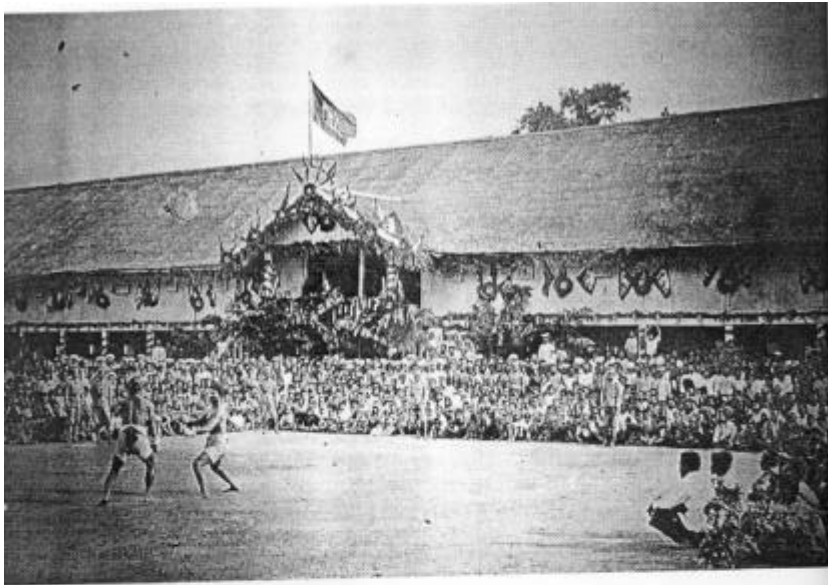
（軍人学校である、ロンリヤン・ナイローイ・プラチュラ・ジョングラウでムエタイ訓練が行われていた時の写真）





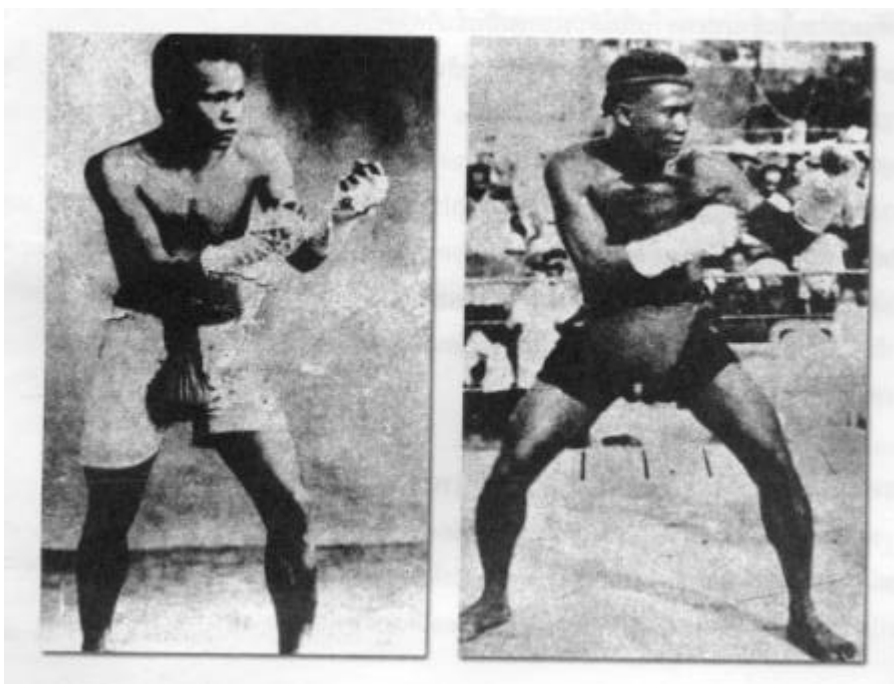
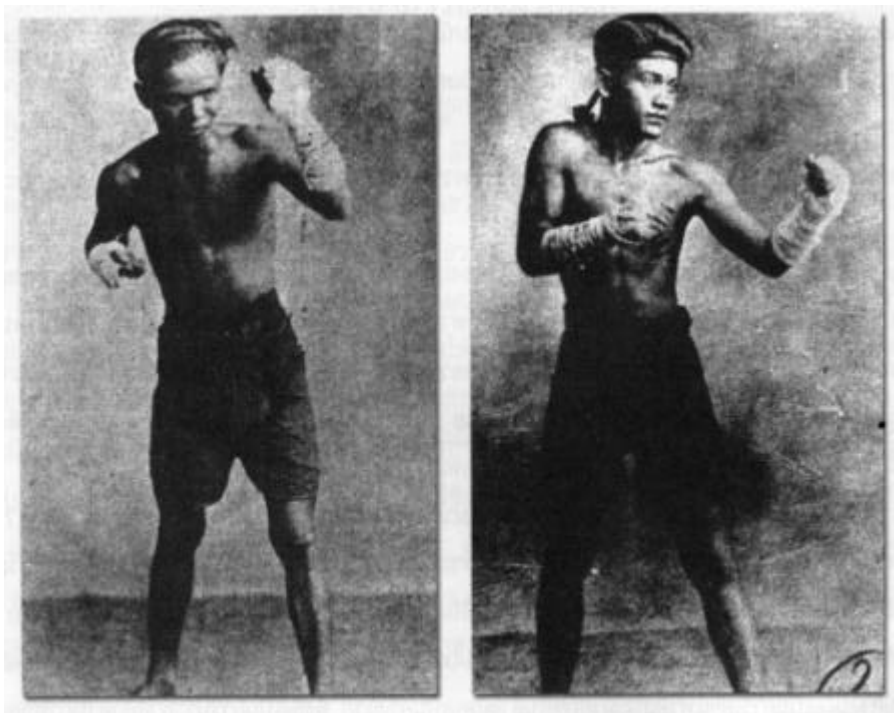
**Fig 26,27** 出身地別ムエカッチュアクの選手

(上の写真は左がコラート県、右がロブリー県。下の写真は左がトンブリー県、右がバンコク市。)



**Fig 28,29** スワンクラブカレッジでのムエカチュアクの試合





**Fig 30,31 ムエカッチュアク選手**  
 (『Rajadamunm 60 pi』 2006,pp64-65 より )